

# 琉球新報

2013年(平成25年)  
10月22日 火曜日  
[日9月18日・友引]

THE RYUKYU SHIMPO

第37635号

発行所 琉球新報社  
〒900-8525那覇市天久905番地  
電話 098(865)5111  
©琉球新報社2013年

王求 亲斤 幸辰

第3種郵便物認可

## 情報収集の重要性指摘 ◆「乳房再建」で勉強会

**乳**がん手術によって胸の形が変形し、乳房の再建について悩む人を対象にした勉強会が16と17の両日、浦添市城間のリボンスハウスで開かれた。東京からエンパワリング ブレストキャンサー(E-B e C)の理事長・真水美佳さんを招き、真水さんを含めた3人の乳房再建経験者が自身の体験を語り、見て触れてもらう体感会も行われた。両日それぞれ約20人の当事者が参加した。



乳房再建について、体験を語った(左から)真水美佳さん、御船美絵さん、大場三緒子さんの3人＝浦添市城間、リボンスハウス

乳房再建手術には、インプラントという人工物を胸に挿入する方法と、自分のおなかや背中脂肪や筋肉の一部を移植する「自家組織」で手術する方法の2種類ある。

真水さんは乳がん手術と同時に、おなかの脂肪を移植する「自家組織」で乳房を再建した。

「自家組織の場合は、1週間ほど入院が必要だが、温かく柔らかい自然な感触があり、姿勢によって形が変わる。全て保険が適用される」と説明した。

一方、インプラントは、日帰り手術が可能。ラウンド型という丸い形で流動性の高い内容物の挿入がことし7月から保険適用になったものの、滴の形をした「アナトミカル型」は今のところ自費となる。

乳がん体験者コーディネーターで、東京からこの日のために来県した御船美絵さんは、3年

前乳がんの手術を受けた時に、後日インプラントの再建手術ができるように、水を注入したら膨らむエキスパンダーという組織拡張器を挿入したという。

「乳がん手術から2年たった昨年、インプラントの手術をした。その間エキスパンダーは胸に入ったままだった。いろいろ悩んで決めた。再建前は、胸を見るたび落ち込んでいたが、再建後は二つそろっている自分の胸を見てうれしくなった」と振り返った。

また、県内在住の大場三緒子さんは、約3年前に乳がん手術と同時にインプラントの手術を受けた。「手術後1カ月ほどは何か胸に張り付いているような違和感があった。今では傷も目立たない。乳がんの告知から切除と再建手術まで約1カ月半で深く考える余裕もなかった。手術から1週間で職場復帰し

た」と体験を語った。

集まった約20人の乳がん経験者に、3人は実際に再建した乳房を見て触れてもらった。参加者の一人は「インターネットや写真などで人工乳房を見たことはあったが、実際目の当たりにしたのは初めて。悩んでいるのは自分一人じゃないと分かり、すてきな胸を見て希望が持てた」と語った。

質疑応答では「二十数年前に手術して、今60代だが、この年齢でも手術は受けられるか」「再建手術の病院はどのように選んだらいいか」という質問が

上がった。

勉強会はE-B e Cの全チャランの一環で開催した催の乳がん患者の会「ぴんぱんさあ」の与儀淑恵さん「再建手術はまだ過渡期。適用になったと言っても、のためには講習を受けた医か執刀できず、情報も少ないと語り、情報収集や意見交場の重要性を指摘した。

再建手術の情報は、E-B e Cのホームページ<http://www.bec.com/>まで。

(知花亜)